

『聖蹟図説諺解』
翻字と現代語訳

土
屋
育
子

佐賀大学文化教育学部研究論文集 第17集 第2号
JOURNAL OF THE FACULTY OF CULTURE AND EDUCATION
SAGA UNIVERSITY
VOLUME 17, NUMBER 2
January 2013

『聖蹟図説諺解』 翻字と現代語訳

土屋 育子

Transliteration and Translation of the “Seisekizusetsugenkai”

Ikuko TSUCHIYA

要旨

本稿は江戸時代出版された『聖蹟図説諺解』（上下二冊）を翻字し、現代語訳を施したものである。作者は江戸時代の朱子学者として有名な林羅山（一五八三～一六五七）であるが、その刊行は彼の死後、一六五九年にかかる。『聖蹟図』とは、孔子の行状を図と文で語るもので、中国では明清時代に流行し、その後日本にも輸入されたのである。『聖蹟図説諺解』は、この『聖蹟図』をもとに漢字仮名交じり文にしたもので、一部には語句の解説も入れるなどして、当時の人々に対して理解しやすさを配慮した内容となっている（原本はくずし字）。なお、底本は国立公文書館所蔵本を用いた。

本書をめぐる問題の解明は、江戸時代における中国文化受容の様相を明らかにすることにもなるであろう。本稿は、その一助となるべく公表するものである。

前言

『聖蹟図説諺解』は、二十八枚の図とともに、和文で孔子の生涯が語られたものである。原本は国立公文書館その他に所蔵されており、上下二冊からなり、上冊三十丁（史記世家五丁・本文二十五丁）・下冊二十七丁、巻末には「右聖蹟圖説諺解奉 台命作之／道春／萬治二己亥初春吉旦／荒川四郎左衛門板行」とある（「道春」は林羅山の法号）。具体的な構成は、巻頭に「史記世家」として、孔子の伝記が置かれている。この文の原典は『史記』「孔子世家」そのものではなく、朱熹『論語集注』の冒頭に附された「論語序説」の一部で、「史記世家曰」で始まる孔子の簡単な伝記である。その後本文となり、第一～第十五までが上冊、第十六～第二十七までが下冊に収められる。巻末には、跋文と刊記が付されている。

原本にあたる『聖蹟図』に関しては、佐藤一好・竹村則行諸氏による一連の論考で詳しく論じられているので、そちらを参照されたい。

凡例

底本には『聖蹟圖説諺解』（上下二冊、万治二年（一六五九）刊、国立公文書館内閣文庫蔵）を使用し、翻字、現代語訳を施した。ただし、跋文については、竹村則行氏の研究発表レジュメ（「林羅山『聖蹟図説諺解』に記録が残る明・鄧棨の跋について」〔第六〇回九州中国学会大会 二〇一二年五月十三日〕）においてすでに示されているため、今回の翻字の対象から外した。

翻字にあたっては、字体・濁点など出来る限り原本の文字を使用した。また、句読点などは、異体字等でやむを得ない場合は常用漢字に直した。また、句読点を読みややすさを考慮して適宜補った。本文における記号は、誤字が疑われるときは正しいと思われる文字を（ ）、赤字を補うときは《 》、左側に付されたルビは「 」、空格は□で示す。

聖蹟圖説諺解
史記世家

漢司馬太史遷 撰
宋朱文公熹 纂

孔子の名は丘、あざなは仲尼、そのさき宋人なり。父を叔梁紇といふ。魯の襄公二十年、かのえいぬのとし、十一月かのえ子の日をもつて、孔子を魯の昌平郷の陬邑にうめり。いとけなくちごたりし時、あそびたはふるに、つねに粗豆をつらね礼容をまふく。ひと、なるにおよんで委吏となる。料量平なり。司職吏となる。けだもの蕃息す。周にゆきて礼を老子にとふ。すでにかへりて弟子ますくす、む。昭公二十五年きのえ申、孔子とし三十五の時、昭公齊の国にはしりて、魯国

みだれたり。孔子こ、におみて齊にゆきて、高昭子が家臣となりて、景公に通ず。景公これを封するに尼谿の田をもつてせんとす。晏嬰きかず。景公まとひぬ。孔子さつて魯にかへり、定公元年みづのえ辰、孔子年四十三。此時季氏強僭せり。季氏が臣陽虎乱をおこしまつりごとをもつはらにす。このゆへにこうしつかへす。しりぞひて詩書礼楽をおさむ。弟子いよくおほし。十九年かのえ子、孔子とし五十一の時、公山不狃を以て季氏にそむく。孔子をよぶ。ゆかんとすれともつゝにゆかず。定公孔子をもつて中都の宰とす。一年の間に四方これにのりとる。つゝに司空となる。又大司寇となる。十年かのとうし、定公をたすけて齊侯に夾谷に會す。齊の国の人、魯に侵地をかへす。十二年みづのとう、仲由をして季氏が宰たらしむ。三都をこほちその甲兵をおさめんとす。孟氏成をこほちかへんせず。これをかこめどもかたず。十四年きのとのみ、孔子とし五十六なり。相の事を撰し行ひ、少正卯を誅す。国のまつりごとをあづかりきくこと三月、魯国大におさまる。齊の国の人、女楽をおくりてこれをは、む。季桓子これをうく。又郊の祭に幡祖を大夫にいたさず。孔子行ぬ。衛にゆきて、子路か妻のみに顔濁鄒が家を主とす。陳にゆきて匡をすく。匡人これを陽虎なりとおもひてとらふ。すでにとけて衛にかへり、蘧伯玉が家があるじとす。南子にまみゆ。去て宋にゆく。司馬桓魋これをころさんとす。また去て陳にゆきて司城貞子か家があるじとす。居こと三歳にして、衛にかへり、靈公是をもちゆることあたはず。晋の趙氏か家臣佛肸といふもの、中牟を以てそむき、孔子を呼ぶ。ゆかんとすれとも又はたさず。にしのかた趙簡子にまみへんとして、河にいたりてかへる。また蘧伯玉か家があるじとす。靈公陳をとふ。こたへずしてさる。又陳国にゆく。季桓子死る時、衛に言して康子にかりて、かならず孔子をよべと云。其臣是をとむ。康子すなはち冉求をよぶ。孔子蔡にゆき葉にゆく。楚の昭王書社の地をもつて孔子を封せんとす。令尹子西、是をきかずしてやみぬ。孔子また衛

にかへる。靈公すでに卒して、衛の君輒、孔子を得てまつりことをせん
とす。しかるに冉求季氏が相となりて、斉の国とた、かひて、かちて功
あり。康子すなはち孔子をよぶ。孔子魯にかへる。まことに哀公の十一
年ひのとのみにして、孔子のとし六十八なり。されども魯つるにもちゆ
ることあたはず。孔子もつかへん事をもとめず。すなはち書を叙し、禮
記を傳し、詩をけづり、樂を正し、易の彖・繫・象・說卦・文言を序
づ。弟子おほむね三子あり。身六藝に通ずるもの七十二人あり。十四年
かのえさる、魯にしのかりに麟を獲たり。孔子春秋をつくる。明年か
ののとり子路衛に死す。十六年みづのえいぬ、四月つちのとのうし、
孔子卒しぬ。とし七十三。魯の城北の泗上にはうむる。弟子みな心喪
を服し、三年にしてさる。たゞ子貢そのつかのほとりに廬する事、およ
そ六年。孔子の子、名は鯉、あさなは伯魚、さきだちて卒す。伯魚の子
伋、あさなは子思、中庸をつくる。

〔訳〕孔子の名は丘、あさなは仲尼、その先祖は宋の人である。父を叔
梁紇という。魯の襄公二十年、庚戌のとし、十一月庚子の日に、孔子を
魯の昌平郷の陬邑に生んだ。あどけない子供のころ、いつも俎豆（儀式
でつかう器）を並べ儀式の様子をまねて遊んでいた。成人して委吏とい
う役人になった。穀物の量り方が公平であった。司職吏になった。家畜
の数が増えた。周に行つて礼を老子に尋ねた。帰国してからは弟子がま
すます多くなった。昭公二十五年甲申、孔子が三十五歳の時、昭公が齊
国に逃げて、魯国が乱れた。孔子はそこで齊に行つて、高昭子の家臣と
なつて、景公の面識を得た。景公は孔子を尼谿の耕作地に封じようとし
た。晏嬰が反対した。景公は迷いが生じた。孔子は齊を立ち去り魯に帰つ
た。定公元年、壬辰、孔子は四十三歳であった。この時季氏が強くなつ
て君主をないがしろにした。季氏の家臣陽虎が乱を起こし、まつりごと
を専断した。このため孔子は（魯に）仕官しなかつた。退いて詩・書・
礼・樂を勉強した。弟子はますます多くなった。十九年庚子、孔子が五

十一歳のとき、公山不狃が費を拠点に季氏に背いた。孔子を呼びよせた。
孔子は行こうとしたけれども結局行かなかつた。定公は孔子を中都の宰
にした。一年のうちに四方に法令が行き渡つた。とうとう司空になった。
また大司寇となつた。十年辛丑、定公を補佐して齊侯に夾谷で会見した。
齊の国の人は、魯に侵略した土地を返還した。十二年癸卯、仲由（孔子）
を季氏の宰に任命した。三都を陥れその軍隊を手中にしようとした。孟
氏（孟孫氏）は成を陥れることを承知しなかつた。これを包囲したが勝
てなかつた。十四年乙巳、孔子は五十六歳であつた。大臣の職務を引き
受け、少正卯を誅殺した。国のまつりごとを三ヶ月間担当し、魯国はた
いへんよく治まつた。齊の国の人が、女の樂人を送つてきて政治を乱そ
うとした。季桓子はこれを受け取つた。また郊外での祭に膳俎を大夫に
しなかつた。孔子は魯国を立ち去つた。衛に行つて、子路の妻の兄顔濁
鄒の家に居候した。陳に行く途申匡を通りすぎた。匡の人たちは孔子を
陽虎と間違えて捕らえた。いましめが解かれてから衛國へ帰り、蘧伯玉
の家に居候した。南子にまみえた。立ち去つて宋へ行つた。司馬桓魋が
孔子を殺そうとした。またそこを立ち去つて陳に行き司城貞子の家に居
候した。三年間そこにおいて、衛に戻つた。靈公は孔子を用いることがで
きなかつた。晋の趙氏の家臣佛肸というものが、中卒で背き、孔子を呼
び寄せた。孔子は行こうとしたがまた果たせなかつた。西の方に趙簡子
にまみえようとして、河（のところ）まで行つて戻つてきた。また蘧伯
玉の家に居候した。靈公が陳について尋ねた。孔子は答えずに立ち去つ
た。また陳の国に行つた。季桓子は死ぬるとき、（子の）康子に「自分が
死んだら）必ず孔子を呼び寄せよ。」と遺言した。その臣下はそれをや
めさせた。康子はそので冉求を呼び寄せた。孔子は蔡に行き葉に行つた。
楚の昭王は書社の地に孔子を封じようとした。令尹子西がこの計画に反
対して沙汰やみとなつた。孔子はまた衛に帰つた。靈公はすでに死んで
いて、衛の君主輒は、孔子を手元に入れてまつりごとをしようとした。

そうしていると再求が季氏の相となつて、齊の国と戦つて、勝利して功績があつた。康子はそこで孔子を呼び寄せた。孔子は魯に戻つた。じつに哀公の十一年丁巳で、孔子は六十八歳であつた。しかし魯はどうとう孔子を用いることが出来なかつた。孔子も仕えようと求めなかつた。そこで『書経』を書き、『禮記』を伝え、『詩経』の詩を削除し、樂を正しくし、『易』の「象」「繫」「象」「説卦」「文言」を配列した。弟子はおよそ三千人いた。六藝に通じているものは七十二人いた。十四年辛申、魯の西の狩り場で麒麟を捕獲した。孔子は『春秋』を作つた。翌年辛酉子路が衛で死んだ。十六年壬戌、四月己丑、孔子は亡くなつた。七十三歳であつた。魯の城北の泗上に葬られた。弟子たちはみな心喪を服し、三年たつたところで立ち去つた。ただ子貢はその墓の近くに庵を作り、およそ六年間そこに住んだ。孔子の子の名は鯉、字は伯魚で、孔子よりも早死にした。伯魚の子は伋、字は子思、『中庸』を作つた。

聖蹟圖説諺解 上

第一

孔子の母の名を徴在といふ。魯国の尼丘山の神にいのりて孔子をうむ。このやまのいたゞき、なかくほなり。孔子のいたゞきも、このやまのかたちになり。このゆへに名をきうといふは、尼丘山の丘の字なり。また仲尼ともいふは、尼丘の尼の字なり。孔は氏なり。

〔訳〕孔子の母の名を徴在という。魯国の尼丘山の神に（子供が授かるように）祈つて孔子を（身ごもつて）生んだ。この山の頂上はくぼんでいる。孔子の頭も、この山の形に似ていた。このために名前を丘というのは、尼丘山の「丘」の字（に由来するの）である。また仲尼ともいうのは、尼丘の尼の字である。孔は氏である。

第二

孔子うまれてそのち、叔梁紇死去す。孔子いとけなくしてたはふれもてあそぶに、俎豆をつらぬ。俎豆は、礼儀をと、のへまつりをするときのおつはものなり。時宜しつけのかたちあるなり。

〔訳〕孔子が生まれて、その父叔梁紇が死去した。孔子は幼くて面白がつて俎豆を並べて遊んでいた。俎豆は、礼儀を整え先祖の祀りをするときの器である。ふだんのしつけが現れたのである。

第三

孔子せいじんして年わか、魯国の執権季氏がところに居て委吏となる。委吏は倉づかさなり。此役をするときは、料量平なり。これは米穀のますめたゞしくして、ついへなかりなり。一説に季氏がところにありて、ものかきたりといふ。此義はしかるべからずといへり。

〔訳〕孔子は成人して年若くして、魯の国の執権季氏のところで下役人になつた。この下役人とは倉庫担当であつた。この役目に就いていたときは、量り方が公平であつた。これは米穀を量る柙目が正しくて、無駄がなかつたからである。一説には、季氏のところにいて文章を書いていたという。この説は間違いだと言える。

第四

孔子わかきときに、季氏か司職吏となる。これはうし・ひつじ、六畜のたぐひをやしなひかふ役なり。此ときけだものよくこへて、子をうみおほくなるなり。先祖をまつり、天地をまつるに、うし・ひつじをいけにへとする、そのためなり。

〔訳〕孔子は若いときに、季氏の司職吏となつた。これは、牛・羊・六畜などを養い飼育する役である。このとき、けだものはよく太り、子を沢山生んで数が増えた。先祖を祀り、天地をまつるのに、牛、羊を生け

賢とするので、そのために飼っているのである。

第五

孔子琴ひくことを師襄と云人にまなぶ。十日はかりの間す、ます。此曲に数有。志有。未其人をしらずと云。孔子の云やうは、かすかにして色くろく、形たかふして長し。眼は羊の物を望がことし。周の文王の徳をのべたる曲なるべしといへば、師襄座を立退て、再拜して申けるは、孔子は家師なり。よく此曲をしれり。是は文王操也。文王操は琴の曲に文王の道をあやとりひく声有。

〔訳〕孔子は琴の弾き方を師襄という人に学ぶことにした。十日ほどの間は進歩がなかった。(師襄が言うには)この曲には数があり、志がある。しかしまだその(歌われている)人のことがわかっていない。孔子が言うには、「(その姿は)ぼんやりとして色は黒く、形は高く聳えていゝ。目は羊がものを見るようである。周の文王の徳を述べた曲でありましょう。」と言うと、師襄は座を立てて退き、再拜して申し上げるには、「孔子はわたしの先生です。よくこの曲をご存じです。これは「文王操」です。」「文王操」は琴の曲に、文王の道を織り込んで弾くしらべがある。

第六

孔子南宮敬叔と同道し、魯国より周のみやこへ行て、礼を老子にたつねとふ。南宮敬叔は魯国の臣にて、孔子の友なり。後に孔子の弟子となる。老子は周のみかどにつかへて、柱下史となりたる人なり。柱下史は帝王の書物おさめたるころの役人なり。このゆへに礼儀作法をしるなり。

〔訳〕孔子は南宮敬叔と同道し、魯の国から周の都に行つて、礼について老子に尋ねた。南宮敬叔は魯の国の臣下で、孔子の友人である。後に孔子の弟子となる人物である。老子は周の天子にお仕えし、柱下史となつ

た人である。「柱下史」は帝王の書物を納めていゝころの役人である。そのため礼儀作法を知つていゝのである。

第七

孔子三十五歳の時に、魯国の執権季平子と云もの罪有。魯国の君昭公兵を以て季平子をせむ。季平子・孟孫氏・叔孫氏の三人同道して昭公とた、かふ。孟孫と叔孫と季平子とを三家となつて、皆魯国の執権なり。昭公うちまけて、わがくにをのき、齊のくにへはしる。齊は魯国のきたどりの国なり。孔子も齊の国へおもむき、高昭子がいゝに居れり。高昭子は齊のくにの家老なり。それより齊の国のきみ景公へ通ぜらる。景公は齊のきみの名なり。此ときその音楽のつかさの大師と、韶樂の事を聞、おもしろくおほえ、三ヶ月これをまなぶ。こゝろによくかなふゆへに、食事をわする、ばかりなりといへり。韶樂はむかしよりつたへ来る、虞舜と申聖王の樂なり。

〔訳〕孔子三十五歳のときに、魯国の執権季平子というものが罪を犯した。魯国の君昭公は兵を率いて季平子を攻めた。季平子・孟孫氏・叔孫氏の三人は一緒になつて昭公と戦つた。孟孫と叔孫と季平子とは三家と呼ばれ、いづれも魯国の執権であつた。昭公は戦いに負け、魯国を脱出して、齊国へ敗走した。齊は魯国の北隣の国である。孔子も齊国に赴き、高昭子の家に滞在した。高昭子は齊国の家老である。そのついで齊国の君景公に名を知られるようになった。景公は齊の君主の名である。この時、音楽の役所の大師から、韶樂のことを聞き、興味を抱き、三ヶ月間これを学んだ。没頭するあまり、食事を忘れるほどであつたという。韶樂は昔から伝わる虞舜と申し上げる聖王の樂である。

第八

齊の君景公、まつりごとをとふ。孔子こたへて、まつりごとは財を節

するにありといへり。一年中の財の入と出るとをかんかへて、おさむるよりもつかふことのおほからぬやうにするを財を節すと云なり。かくのごとくなれば、おごりなくして、無益のついでなし。景公これを聞、尤とよろこび、尼溪といふ大きな地を孔子の所領とせんとす。しかるところに、景公の臣に晏嬰といふものあり。申けるは、儒者は口きくといへとも、法とすへからず。ほこりて自順なれば、下としがたし。君もし是をもちるとせば、齊の国の風俗うつりかはりて、たみをおさめがたしといふ。その、ち景公此さ、へを聞いて、孔子にかくりて、われとしよりたり。用ることあたはじといふ。これによりて孔子退きさる。

*かくりて……「かたりて」の誤りか。

〔訳〕齊の君主景公が、まつりごとについて尋ねた。孔子はこたえて、「まつりごとは財政を管理することが大事だと言います。一年間の財政の収入と支出を考えて、お金が入ることより遣うことが多くないようにするのを財政を管理すると言うのです。こうすれば、贅沢をすることがなく、無駄遣いがありません。」景公はこれを聞いて、非常によろこんで、尼溪という広い土地を孔子の領地にしようとした。そうしたところに、景公の臣下に晏嬰という者がいて、申し上げるには、「儒者は口が達者だからといって、その言った事を法としてはいけません。誇って自分勝手なので、臣下とするのは難しゅうございます。この者を取り立てようとされるなら、齊の国の風俗は変わり、民衆を治めにくくなります。」と言った。そのち景公はこの中傷を聞いて、孔子に「私は歳を取った。(そなたを)雇うことはできぬ。」と言った。これによつて孔子は齊の国を立ち去った。

第九

孔子四十三歳の時、魯のきみ昭公卒去し、其弟定公立て、魯の君となる。その執権季氏まつりごとを専とし、威をふるひて君のいきほひに

ことならず。季氏が家人も弥権柄をほしひまゝにして、国のまつりごとをとれり。かるかゆへに孔子つかへずして、しりぞひて詩書礼樂をおさめて、弟子門人ますます多し。詩書礼樂は五経の事也

〔訳〕孔子四十三歳の時、魯の君昭公が亡くなり、その弟定公が即位して魯の君となつた。その執権季氏はまつりごとを専横し、威張り散らして君主のようにしていた。季氏の家人もますます権柄をほしいままにし、国のまつりごとを牛耳つた。そのために孔子は仕官せず、退いて詩・書・礼・樂を修め、弟子・門人がますます多くなつた。詩・書・礼・樂は五経のことである。

第十

魯のきみ定公即位の十年の春、齊の国のきみと夾谷といふところに參會す。たがひに用心して対面せらるゝなり。此とき孔子まつりごとにあづかりて、定公にしたがひゆく。献酬とて酒盃の礼おはりて、齊の国の奉行四方のがくをまはせんと云て、ゑびすの樂人おほく旗をあげ、大鼓をたゝきてすゝみ出づ。孔子これを見て、はやく階(きさはし)にのぼり、袂をあげ高声に、兩國の君まさしく対面有所へ、いかんぞゑびすの舞樂を奏せんや。役人に仰て退んといふ。景公はちて手をあけて是を退。しばらく有て又齊國の奉行宮中の樂をはやしめんと云て、倡優・侏儒出たはふれをなす。倡優は狂言のたくひ也。侏儒は身のたけ甚ひききたなき者也。孔子これを見て、又進て申されけるは、賤ものにして國君をまどはし、あざむく時は、罪にあつべし。役人に仰て法度にあてんといふ。景公大きにおそれやむ。國に帰て其群臣にかたりて云けるは、魯國の人は群臣の道を以て、其君をたすく。しかるになんぢら、ゑびすの道を以てわれをおしへみちびき、つみを魯の君より得せしめたりとて腹立す。こゝにおゐる魯國の地の鄆・汶陽・龜陰と云所を、まへかたに齊の國へ押領したるを、只今魯國へもとのことくかへ

す。

〔訳〕魯の君定公即位の十年の春、齊国の君と夾谷というところで会見した。お互いに用心して対面されたのである。このとき孔子は政治に参加して、定公に付き添って出かけた。献酬といって酒盃の礼が終わって、齊国の役人が「四方の舞樂を舞わせましょう。」と言って、夷狄の樂人が現れ旗を掲げ、太鼓を叩いて進み出した。孔子はこの様子を見て、素早く階に上り、袂をあげて大声で、「両国の君主がまさに対面するという場に、なにゆえ夷狄の舞樂を演奏させるのでしょうか。役人にお命じになって止めさせてください。」と言った。景公は恥じて手を挙げて樂人を下がらせた。しばらくして、今度は齊国の役人が「宮中の音樂を演奏させましょう。」と言って、倡優・侏儒が出て来て滑稽なしぐさをして見せた。倡優は狂言のたぐいである。侏儒は身長が非常に低い汚い者である。孔子はこの様子を見て、また進み出しておっしゃるには、「賤しい者が国君を惑わし、欺くときは、罰するべきです。役人にお命じになって法によってお裁きください。」と言った。景公は大いにおそれて取りやめた。国に帰ってその群臣に語って言うには、「魯国の人は群臣のあるべき道で、その君主を補佐している。なにお前たちは、夷狄のやりかたでわしを教え導き、罪を魯の君に責められることになった。」と言って立腹した。こうして魯国の領地であった・鄆・汶陽・龜陰というところを、以前齊国が横取りしていたのを、魯国へ元通り返還した。

《第十一》

魯のきみ定公即位の十四年にあたりて、孔子年五十六、大司寇となりて相の事をかねおこなふ。大司寇は刑罰法度をつかさどる官也。孔子此官に成て政をおこなふ時に、魯国に少正卯といへる小人の悪人有。此人大夫の位にて、政をみだりし故に、是をとらへて誅せり。孔子三ヶ月の間、政をとり行ければ、羔〔ひつし〕豚〔いのこ〕を賣ものそら

ねをいはず、男女往還の者路をおなじくせず、又道路におちたる物をひろはす。

〔訳〕魯の君主定公即位の十四年に、孔子は五十六歳で大司寇となって大臣の職務を兼任した。大司寇は刑罰・法度を司る官である。孔子がこの官になってまつりごとを執っているときに、魯国に少正卯というつまらない悪人がいた。この人は大夫の位にあって、まつりごとを乱したので、捕らえて誅殺した。孔子が三ヶ月間まつりごとを執り行ったので、羊や豚の商売人は法外な値段をふっかけることがなく、男女は行き来に同道することがなく、また人々は道に落ちているものを拾わなかった。

第十二

孔子魯国を出て衛の国へゆき、又衛の国を去り陳の国へゆく。其路次に匡と云所有。其所の人多集来て、孔子をおしとめんとす。是よりさきに陽虎と云者来て、匡の人をそこなふ。孔子の形陽虎に似たり。故に孔子をやうこなりと思て、あやまつてせめとむること五ケ日に及ぶ。孔子のとももの、衛国の臣甯武子によりて、無事に此處をとる。

〔訳〕孔子は魯国を出て衛国へ行き、また衛国を立ち去って陳国へ向かった。その途中、匡というところがあった。その土地の人が多く集まって、孔子を抑留しようとした。これより前に陽虎というものが来て、匡の人を虐待した。孔子の容貌は陽虎に似ていた。そのために孔子を陽虎だと思つて、誤つて五日間抑留したのである。孔子の同行者、衛国の家臣甯武子のおかげで、無事にここを通過した。

第十三

孔子衛の国より蒲と云所にゆく。一ヶ月あまりありて衛の国へかへり、蘧伯玉か家に宿す。蘧伯玉は賢人にて、衛の国の大夫なり。衛の

国の君靈公、その妻夫人と同車にてありく。時に孔子は次乗せよと云。次乗とは車にのりてしたがひありくこと也。孔子これを聞いて、いまだ徳をこのむこと色をこのむがことくなるものをみずといへり。

〔訳〕孔子は衛国から蒲というところへ行つた。一カ月あまりで衛国に戻り、蘧伯玉の家に宿泊した。蘧伯玉は賢人で、衛国の大夫である。衛国の君靈公は、その妻夫人と車に同乗して出かけていた。ある時、(靈公は)「孔子は次乗せよ。」と言つた。次乗とは車に乗って付き従つて出かける事である。孔子はこれを聞いて、「いまだ徳を好むことを色を好むようにする者を見たことがない。」と言つた。

《第十四》

孔子衛の国より曹の国にゆく。此年魯の君定公卒去す。孔子曹の国をのきて宋の国へゆく。弟子と大木の下にて礼儀を教ならはしむ。宋の国の臣司馬桓魋と云者有。孔子をにくみて木を引たふして是をころさんとす。弟子等是をみてのくべしと云ければ、孔子聞て、天徳をわれになせり。桓魋いかんとも多せじといへり。桓魋天命に背て、孔子を害することあたはじ。孔子は天命にしたがひて罪なしと云義也。

〔訳〕孔子は衛の国から曹の国へ行つた。この年魯の君主定公が亡くなつた。孔子は曹の国を退いて宋の国へ行つた。弟子と大木の下にいて礼儀について教へ習わせていた。宋の国の家臣司馬桓魋という者がいて、孔子を憎んで木を引き倒して殺そうとした。弟子たちがこれをみてお逃げになることと云つたところ、孔子は聞いて、「天が私に徳を与えようとしているのである。桓魋には(私を) どうすることもできない」と言つた。桓魋は天命に背いて孔子を殺すことはできないだろう、孔子は天命によって無実であるという意味である。

第十五

孔子宋の国を去て鄭の国にゆくととき、弟子と路次あとさきちがひて、孔子ひとり東門に立。鄭の国の人これをのそみて、子貢にかたりけるは、東門に人あり。其類は堯に似たり。そのうなじは臯陶に似たり。その肩は子産に似たり。しかれども肩より下三寸ばかり、禹におよばず。累々然とつかれやせたること、喪家の狗のごとしといふ。子貢此ことを孔子へ申ければ、孔子わらひていへる。□*がかたちのことはいまだいかゞあらむや。喪家の狗に似たりと云はさもあるべしといへり。堯はいにしへの聖王の名也。臯陶は堯の臣にて大賢人なり。子産は鄭の国の名臣なり。禹もいにしへの聖王なり。喪家のいぬとは、喪あるひとのいぬはものいみあるゆへに、いぬも飲食ともしくてやせおとろふるなり。子貢は孔子の弟子なり。

*□：…原本では文字が消えている。「己」が入るか。

〔訳〕孔子が宋国を立ち去つて鄭の国に行くとき、弟子と到着の順が違つて先に着いてしまい、孔子は一人で東門に立つていた。鄭の国の人はいれを遠くから見ても、子貢に「東門にいる人は、額は堯に似ていて、うなじは臯陶に似ていて、肩は子産に似ている。しかし肩から下三寸ほどは、禹に及ばない。げっそりと疲れて痩せているところは、喪家の狗のようだ。」と言つた。子貢はこのことを孔子に申し上げると、孔子は笑つて言つた。「容姿のことはいまだどうかかわらない。喪家の狗に似ているとはそのとおりだろう。」と言つた。堯は昔の聖王の名である。臯陶は堯の家臣で大賢人である。子産は鄭の国の名臣である。禹も昔の聖王である。喪家の狗とは、服喪中の家は物忌みがあるので、犬も飲食が十分でなく痩せ衰えるのでそういうのである。子貢は孔子の弟子である。

聖蹟圖説諺解 下

第十六

孔子陳の国にゆひて、司城貞子をしてその家に宿す。一年あまりありて隼あり、陳のきみの庭にとび来りて死す。楛矢に射つらぬかる。石のやじりあり。矢のなかさ一しやく八寸。楛矢はから木を以てためたる矢なり。陳の君憫公あやしみて孔子にとふ。こたえていはく、これ肅慎の矢也。むかし周の武王いくさをおこし、殷紂にうちかちて、のちに陳のくにへ肅慎の矢をたまふ。楛木をためたる矢にて、いしをもつて矢のねとす。たからもの、しるしなりといへり。陳のきみこれによりてくらをあけて、ふるきたからの中をかんがふるに此矢あり。肅慎は北方のえひすのくになり。韃靼国のうちにあり。そこにいていられたる。はやぶさ矢をおひなから遠飛て、陳の国へ落たる也。

〔訳〕孔子は陳の国へ行つて、司城貞子を主人としてその家に滞在していた。一年あまりして、ハヤブサが陳の君主の庭に飛んできて死ぬということがあった。楛矢に射貫かれたのである。石のやじりがついている。矢の長さは一尺八寸である。楛矢は楛木で作った矢である。陳の君憫公は不思議に思って孔子にたずねた。孔子が答えて言うには、「これは肅慎の矢です。むかし周の武王が戦争を起こし、殷の紂王に打ち勝つて、のちに陳の国に肅慎の矢を賜つたのです。楛木で作った矢で、石を矢の根とします。宝物である証拠です。」と言った。陳の君主はこの言葉によつて国の蔵を開けて、古い宝物の中を探したところこの矢があった。肅慎は北方の夷狄の国である。韃靼国の中にある。そこで作られたのである。はやぶさは矢を受けたまま遠く飛んで、陳国に落ちたのである。

第十七

孔子蒲と云ところより、衛の国へゆく時、弟子とともに磬をうつ。磬は石を以て作る。長板のかたちになり。音楽の器也。篲をになふもの、門前をとをり、此磬のこゑをきくに、世をうれうる心有によりて云けるは、心有故、磬をうつことに。只今世おとろへて道おこなはず。

みちおこなはんとおもふ心はやむべきなり。むよふのことなり。此心あるはいやくかたまりて通ぜず。たとへは、みつをわたるに、ふかければころもをかゝぐ。あざければもすそをかゝぐ。みづのふかさあざ、をしることくに、ときをしれとなり。孔子これをき、て云るは、かのあしうになふ人は、此世をわすれはてたるなり。おもひきるはやすきことなり。さやうにはあらず。世無道なれば、これをうれへて、道おこなはんと思ふは聖人の心也。篲はわらにてあめる籠也。

〔訳〕孔子が蒲というところから、衛の国へ行くとき、弟子とともに磬を打った。磬は石で作る。長板のかたちに似ている。音楽の楽器である。もっこを担いでいる人が、文選を通りかかり、この磬の音色を聞き、世を憂える心があるために言うには、「心がこもっているな、磬を打つことに。今世の中が衰えて道が行われていない。道を実践しようと思う心は諦めるべきだ。無用のことである。この心があるといやく頑固になつて融通が利かない。例えば、川を渡るとき、川が深ければころもを掲げるし、浅ければ裾を掲げる。水の深さ浅さを知るように、世の流れを知るべきだ。」というのである。孔子がこれを聞いて言うには、「あのもっこを担いでいる人は、この世を忘れてはっているのである。諦めてしまふのは簡単な事である。私はそうではない。この世が無道であれば、これを憂えて、道を行おうと思うのが聖人の心である。」「篲(もっこ)」とは藁で編んだ籠である。

第十八

孔子ひさしく衛の国にあれども、本意をえざれば、これよりしのはうの晋のくにもおもむき、趙簡子にあはんとおもふ。趙簡子は晋のくの執権の大臣なり。衛のくにより晋のくにへゆくろしに大河あり。孔子其河をわたらんとするときに、竇鳴・犢舜華二人ともに死たりとき、なげきて云やうは、よいか、この河水の洋ことさかになかる、

こととき。我かわたらざるはこれ命なり。かの二人は晋のくにの大夫にて賢人なり。趙簡子いまたおのれかこゝろざしをとげさるときは、此兩人を以てまつりことにあつかる。おのれかこゝろざしをえたるにおよびて、兩人をころす。それとりけだものさへ不義の事をさる。いはんやわれをやといひて、河のほとりよりかへる。

〔訳〕孔子は長く衛の国に滞在していたけれども、志を得なかつたので、ここから西方の晋へ赴いて、趙簡子に会おうと思つた。趙簡子は晋国の執権の大臣である。衛国から晋国へ行く途中に大河がある。孔子がこの河を渡ろうとするときに、竇鳴・犢舜華の二人が死んだ聞いて、嘆いて言うには、「いいものだな、この河の水が洋々とさかんに流れているよ。うなのは、私が渡らないのは天命である。あの二人は晋国の大夫で賢人である。趙簡子がまだ自分の野望を遂げていないときは、この兩人の力を借りてまつりごとに参与したのだ。自分の野望が遂げられたときに、兩人を殺したのだ。そもそも鳥やけだものでさえ不義の事は避けるという。まして私であればなおさらそうする。」といつて、河のほとりから帰つて行つた。

第十九

孔子又衛の国へかへる。衛の国の君靈公軍陳の事をとふ。孔子こたへけるは、軍旅のことはいまだまなばず。明日靈公と物語するとき、蜚〔とぶ〕雁あり。靈公あふのきみて、孔子へあいさつすることおこたる。

孔子その無禮をきらひて、衛のくにをさりてまた陳の国へゆく。此とき魯の君哀公即位の三年にて、孔子とし六十。哀公は定公の子なり。

〔訳〕孔子はまた衛の国に戻つた。衛の国の君主靈公は軍陳のことを尋ねた。孔子が応えて言うには、「軍隊の陣列のことは学んだ事がございませぬ。」次の日靈公と語り合つていたとき、雁が飛んでいた。靈公は仰向けに雁を見て、孔子に挨拶することを怠つた。孔子はその無礼を嫌つ

て、衛の国を立ち去り、また陳の国へ行つた。このときは魯の君哀公即位の三年で、孔子は六十歳であつた。哀公は定公の子である。

第二十

明年孔子陳の国より蔡の国へうつり、葉といふ所へゆく。又蔡国へかへる。其ろしに長沮・桀溺といへる二人、すきをならべて耕作す。孔子これを見て、車よりおり、弟子の子路と云ものを使として津をとらしむ。津は水のわたり所をいふなり。こたへて申けるは、滔々と水のながる、かことくなる世にて、いづくもみちおこなはるへからず。天下みな是なり。誰ともにか無道をかへて有道とせんや。そのうへなんぢその人をさる。人にしたかはんよりは世をさる人にしたかふにしかんやと云て、たねかしてやまず。たねかすとはこめのたねを田へまく事也。人をさるとは人きらひをしてぜんあくをゑらぶなり。孔子をさしていふ。世をさるとはとてならぬ道おこなはんとせずして、ひたすらの遁世なり。長沮・桀溺の二人、おのれと自称ずる也。

〔訳〕明年、孔子は陳の国から蔡の国へ移り、葉というところへ行き、また蔡の国に戻つた。その途中長沮・桀溺という二人が鋤を並べて畑仕事をしていた。孔子はこれを見て、車から下りて、弟子の子路という者を使わして「津」を尋ねさせた。「津」とは川の渡し場のことをいう。答えて申すには、「滔々と水が流れるように変化の激しいこの世にあって、どこも道が行われるはずがない。天下、みなこういう状態である。誰とともに無道から有道の状態に変えることができようか。その上あなたはその人のもとを立ち去つたのだ。誰かに付き従うよりは、隠遁する人の真似をするのが一番だ。」と言つて、「たねかし（種稼し）」て手を休めなかつた。「たねかし」とは米の種を田に撒く事である。「人をさる」とは人との交際を嫌つて、善悪の選り好みをすること、孔子を指して言うのである。「世をさる」とは実践が難しい道を実践しようとしな

で、一心に通世することである。長沮・桀溺の二人は自分たちのことであると言っているのである。

第二十一

楚国より使者きたりて孔子を聘す。聘とはいんぎんに車馬をそなへ、音物をおくりて使者をもつて招請するを云なり。孔子ゆかんとす。陳蔡二ヶ国の大夫相談して申けるは、楚国の王もし孔子をもちるは、楚国のいよ／＼つよくならん。しからば陳と蔡と兩國ながら楚国にちかく、かならずせめられてあやうからんと云て、兵をあつめ、ろしの野にいてむかひて孔子をとめかこむゆへに、とをりゆくことあたはず。かてつきともにもありく人々つかれてたつことあたはず。孔子道を講し書をよみ琴ひきうたふことおとろへす。こにおみて子貢を使者として楚国へゆかしむ。楚国のきみ昭王これをき、て、人数おほくつかはし、孔子をむかふ。こうしまぬかれてそこへおもむく。

〔訳〕 楚国から使者がやってきて、孔子を「聘」した。「聘」とは慰勸に車馬を備え、贈り物を贈って使者を遣わして招聘することをいうのである。孔子は行こうとした。陳と蔡の二国の大夫が相談して申すには、「楚国の王がもしも孔子を用いれば、楚国の勢いはますます強くなるだろう。そうなれば陳と蔡はいずれも楚国に近いから、必ずや攻め込まれて危うくなるだろう。」と言って、兵を集め、途中の野原に出て行き、孔子を足止めして取り囲んだので、孔子は通過していくことができない。食糧が尽きて、お供の者たちは疲れて立ち上がることもできない。孔子は道を講義し、書を読み、琴を弾いてうたうことをやめなかった。そこで子貢を使者として楚国へ派遣した。楚国の君昭王はこれを聞いて、人数を多く遣わして、孔子を迎えた。孔子は危機を免れて楚国へ赴いた。

第二十二

楚国のきみ昭王、書社の地を以て孔子を封し、其知行とせんとす。書社の地七百里の所なりと史記にあり。此とき楚国の執権令尹子西といふ大夫いさめて申けるは、王の臣下に諸国へ使者となりてよくもの云へきもの、子貢にたるものありや。また王のたすけとなりて、まつりことをよくせんもの、顔回にたるものありや。また王の軍大將に子路にたるものありや。また諸事奉行せんものに、宰子にたるものありや。顔回・子貢・子路・宰子はみな孔子の弟子にて、楚国にもかやうの人まれなり。孔子書社の地をえて、かの弟子おほくしたがひ来てたすけとならば、楚国のさいはひにあらすといふ。昭王此讒言について、書社の地をやめらる。すでにして孔子又衛の国へかへる。時孔子年六十三。魯の君哀公即位の六年也。

〔訳〕 楚国の君昭王、書社の地を孔子に対して、その知行地としようとした。「書社の地は七百里のところである。」と『史記』にある。このとき、楚国の執権令尹子西という大夫が諫めて申すには、「王の臣下に諸国に使者となつて弁舌が得意な者で、子貢に匹敵する者はおりますか。また王の補佐となつて、まつりごとが得意な者で、顔回に匹敵するものはおりますか。また王の軍隊の大將で子路に匹敵する者はおりますか。また諸事取りはからう者に、宰子に匹敵する者はおりますか。顔回・子貢・子路・宰子はみな孔子の弟子で、楚国にもこれほどの人物はまれでございませぬ。孔子が書社の地を得て、あの弟子が多く従つてやってきて孔子の補佐となれば、楚国にとつてよいことではございませぬ。」と言う。昭王はこの讒言を聞き入れ、書社の地を与えることを取りやめた。そういうことで孔子はまた衛の国に帰った。このとき孔子六十三歳。魯の君哀公即位の六年であった。

第二十二

魯の君哀公即位の十四年、孔子年六十八の時、魯国の執権季康子使者をもつて、孔子をむかふ。すなはち魯国へかへる。然れ共孔子をもちゐて政をせしめず。孔子もつかへんことをとめず。家に居て尚書・礼記をついで、詩をけつり楽をたゞし、易を賛して、象・象・繫辭・説卦・文言を序づ。弟子三千人あり。其内よく六藝に通ずるもの七十二人。

〔訳〕魯の哀公即位の十四年、孔子六十八歳の時、魯国の執権季康子が使者を遣わして、孔子を迎えた。すなわち魯国に帰つたのである。しかし、孔子を用いてまつりごとをさせなかつた。孔子も仕官することを求めなかつた。家に居て、『尚書』『礼記』を書き継ぎ、『詩』『詩経』(の必要な篇)を削り、『楽』を正しくし、『易』(周易)を楽しみ、『象』『象』『繫辭』『説卦』『文言』に序をつけた。弟子は三千人いた。そのうち六藝に通じるものは七十二人であつた。

第二十四

哀公の十四年に、魯国の都の西大野と云所へ狩に出て、麒麟をえたり。孔子これを感じて春秋といへる書を作る。孔叢子と云書にみへたるは、魯国の臣叔孫氏狩をする時に、其きこりする者一つのめつらしき獸をえたり。諸人これをみしることなくして、五父のちまたにすつ。孔子の弟子再有來りて申けるは、鹿の形にて角の上に肉有物有。是天の災を下せるかと云。孔子自行てみて、泪を流し、是きりん也。仁の獸也。今出て死する。我道窮ぬと云て、歎悲り。五父の衢は魯の都の道の辺也。

〔訳〕哀公の十四年に、魯国の都の西、大野というところに狩りに出て、麒麟を捕獲した。孔子はこのことに感じて『春秋』という書を書いた。

『孔叢子』という書に見える記述には、魯国の臣下叔孫氏が狩りをしたときに、きこりが珍しい獸を捕まえた。みなこれが何かわからず、五父

の街中に捨てた。孔子の弟子再有がやってきて申すには、「鹿の形に似て角の上に肉があり物があります。これは天が災いを下したのでしょうか。」と言う。孔子は自ら行ってみて、涙を流して、「これは麒麟である。仁の獸である。今出て来て死んでいる。わが道は窮まった。」と言って、嘆き悲しんだ。五父の街中とは魯の都の道端である。

第二十五

魯の哀公十六年四月に孔子病にかゝる。子貢來てまみへんとこふ。時孔子杖をつき門に逍遙す。逍遙はあそぶ義也。歌うたひて云、泰山くづれなんか、梁木こぼれなんか、哲人しほみなんかと云。哲人は哲人也。其後七日有て、己丑日孔子卒去す。年七十三。

〔訳〕魯の哀公十六年四月に孔子は病氣になつた。子貢がお会いしたいとやってきた。そのとき孔子は杖をついて門口を逍遙していた。逍遙とはあそぶという意味である。歌を歌つていうには、「泰山が崩れてしまふだろうか、うつばりが砕けてしまふだろうか、哲人は病で死ぬのだからか。」と言つた。哲人は哲人である。そのうち七日経つて、己丑の日孔子は亡くなつた。七十三であつた。

第二十六

孔子、魯国の城の北の泗水のほとりにはうむる。弟子みな心喪三年おはりて、あひわかれて去て各哀傷す。心喪とは、心中は父母の喪のこごとくにして、服衣をばきざるを云なり。子貢ひとり、孔子の墓のほとりにいほりをむすびて、居ること合て六年、その、ち帰る。弟子并魯国の人おもむきゆきて、孔子の墓のほとりに家をつくりて居もの百餘家あり。

〔訳〕孔子は魯国の城北の泗水のほとりに葬られた。弟子はみな三年の心喪が終わると、別れて立ち去りそれぞれ悲しんだ。心喪とは、心の中

は父母の喪と同じように思うが、喪服は着ないということをいうのである。子貢はただひとり、孔子の墓のそばに庵を作って、合わせて六年間そこに留まってから帰宅した。弟子と魯の国の人の中には出かけていて、孔子の墓の側に家を作って住む者が百家あまりあった。

第二十七

魯国毎年四季に、孔子の墓まつる。のちの世に廟宮をたて、孔子の衣冠・琴・書籍をおさむ。漢の世に至るまで二百餘年断絶せず。高祖天下をとりて即位のち、魯国にゆく。孔子の廟へ行幸して、みづから太牢のまつりをおこなふ。それよりこのかた代々たゆる事なし。太牢は、うし・ひつじをもちゆるをいふなり。

〔訳〕魯国では毎年四季に、孔子の墓を祀り、後の世には廟宮を建てて、孔子の衣冠・琴・書籍を収めた。漢の世に至るまで二百餘年途切れることがなかった。漢の高祖が天下を取って即位した後、魯国へ行った。孔子の廟に行幸して、自ら太牢の祀りを行った。そのときからいままで（その祀りは）代々途切れたことがない。「太牢」とは、牛や羊を犠牲に用いる儀式をいうのである。

佐賀大学 文化教育学部 日本・アジア文化講座